

●原子力と社会のコミュニケーション

予定調和でない議論とプロセスを踏んだ合意形成を

篠田佳彦 若狭湾エネルギー研究センター 主任研究員

人々が原子力や放射線をどう見ているか。もともと原子力技術者である私が、社会科学の手法で意識調査を行っているのは、データをもとに根本原因を探り解決策を導きたいと考えてのことだ。スタンスとしては原子力を推進という姿勢を一旦脇に置いて、中立であることを心がけている。特定の立場に立ってしまうと、物事の片面しか見えなくなりがちだ。中立であろうと心がけることは原子力に関するコミュニケーションの場の設定や運営においても極めて重要だと考えている。

私が関わった調査として、首都圏住民を対象に2007年から14年1月まで毎年実施した「エネルギーと原子力に関する定期意識調査」がある。それによると例えば原子力発電の利用について、首都圏住民は福島第一原子力発電所事故の前までは利用すべきという意見がほぼ40%以上、やめるべきは10%台だったのに、事故後は大きく逆転。戦争や革命でもない限りあり得ないような劇的な意識変化が見られた。事故直後はともかく、通常、事故等の影響は次第に薄れ数値もやがて元に戻る傾向があるが、今回の意識変化は事故後3年経過してもそのままだ。

ただ、原子力の有用性自体を否定する意見は、今もさほど多いわけではない。「不安はあるが必要だから仕方がない。但し将来的にはどうか」というのが、多くの人のスタンスではないだろうか。

留意すべきは、電力会社や原子力行政への信頼が大きく損なわれたことだ。福島第一の事故前は、市民の側も「お任せ主義」——専門家に判断を任せ、何もなければ原子力への信頼性は高まっていたが、事故によりその

構図は崩れた。今後は市民が自ら考えるという姿勢が大事。原子力を推進する側が積極的に信頼獲得への努力を続けるとともに、原子力やエネルギーの今後について、どのようにみんなで議論し合意を形成していくか、その方法論を構築しないといけない。

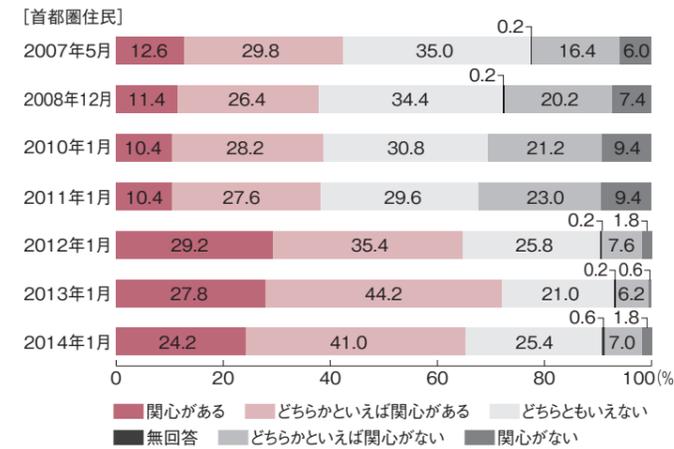
推進する・しないといった立場は一旦置いて、討論の場を設けてはどうか。予定調和でない話し合いの場が必要だ。最初から推進ありきという姿勢で相手を説得することは、長い目で見ると得策ではない。推進したい側が誠意を持って倫理的に物事を進めない限り、信頼は取り戻せない。

以前は、「原子力の知識がないから反対するのだ。教えることで安心してもらえる」と考えて取り組むことが多かった。その意識を改めなければならない。自分が立地地域に住んでいたらどう感じるか？ 相手の立場で物事を考えたとき、共感できるかどうかが鍵になる。

それは、原子力発電所の再稼働に向けた話し合いでも同様だ。合意形成のプロセスにもう少し手をかけるべき。敦賀・若狭などの立地地域では、原子力に馴染みもあり、比較的冷静な話し合いができるだろう。但し今後難しいのは、これまで深くコミュニケーションしてこなかった地域の人々との話し合いが増えること。時間はかかるだろうが、「急がば回れ」ということも弁えたい。

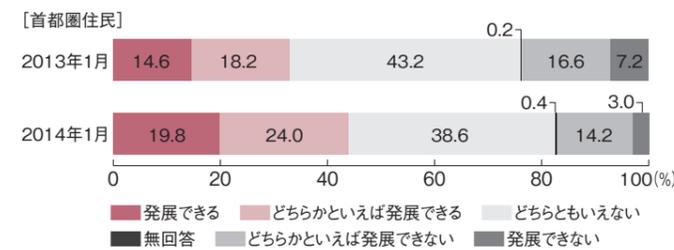
推進側は原子力の有用性や必要性を強調するが、それを言い過ぎるのも逆効果だ。必要性は各自が自ら認識するものであり、たとえ誠実に伝えても、強調しすぎると逆に疑念を持たれかねない。安全性についても、「安全が担保された原発の再稼働を」と言われるが、安全を担保するというよりも、むしろ「危ないことを最小限にする」

Q 原子力発電に関心がある？ それとも関心がない？



出所:日本原子力学会「エネルギーと原子力に関するアンケート」調査のデータをもとに作成

Q 原子力発電がなくても日本は経済的に発展できる？ それとも発展できない？



出所:日本原子力学会「エネルギーと原子力に関するアンケート」調査のデータをもとに作成

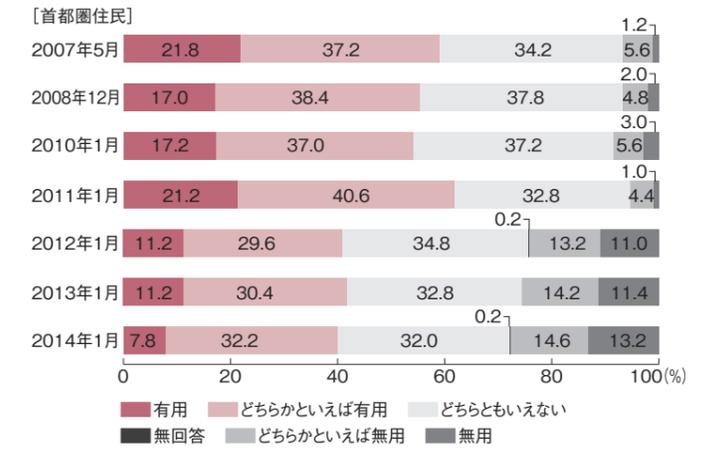
という覚悟で取り組み、それを担保するしかない。

原子力にはベネフィットもあるがリスクも伴う。トレードオフの関係下で、リスクを選択するかどうか。人間は、それを自分で判断したいものだ。選択や判断はリスクから切り離すことはできない。意見を封じ込めて合意をとりつ



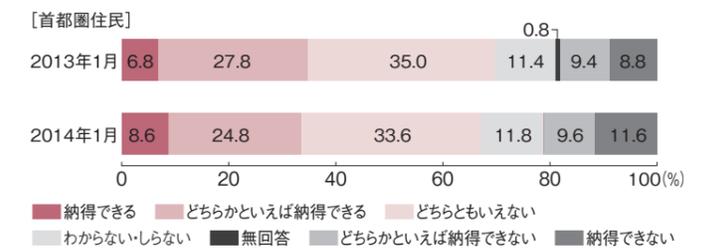
しのだ よしひこ
若狭湾エネルギー研究センター
研究開発部 エネルギー開発グループ 主任研究員
1984年東京工業大学大学院総合理工学研究科修士課程修了。動力炉・核燃料開発事業団(現・日本原子力研究

Q 原子力発電は今日の社会や人々の生活にとって有用？ それとも無用？



出所:日本原子力学会「エネルギーと原子力に関するアンケート」調査のデータをもとに作成

Q 原子力発電が地球温暖化対策に有効なエネルギー源であることに変わりはない？



出所:日本原子力学会「エネルギーと原子力に関するアンケート」調査のデータをもとに作成
<http://www.ponpo.jp/DMWG/index.html>

けても、後で何か起きると却って不信が高まる。わだかまりなく推進できる環境をつくっていくことこそ大事だ。

原子力への信頼を回復する特效薬はない。原子力に携わる側が自ら意識を変えていけるかどうか。すべてはそこにかかっている。☒